

聴覚および視覚による表現（下）：「なり」と「めり」の消長について

春日，和男

<https://doi.org/10.15017/2332834>

出版情報：文學研究. 60, pp.49-70, 1961-03-20. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

聴覚および視覚による表現 (下)

—「なり」と「めり」の消長について—

春 日 和 男

○ 標題を掲げて、(上)の部(本誌第五十六輯昭和三十一年七月)を

書き下してから既に四年近く過ぎた。この間終止形承接のナリに
関して、かなりの論文が発表され、わたくしの考えもそれなりに多
少の変化はあった。思うにこのナリ(以下単にナリという場合はす
べて活用言終止形承接のものについていう。)に対する伝聞推定の
意義肯定論者と否定論者との相違は解釈学的語義論に重点を置く
か、文法学的機能論に重点を置くか、あるいは通時的語構成論に立
脚するか、共時的または現象学的語形論に立脚するかという立場
上の相違であって、これは恐らく永久に交点を見出せない平行線
を画くかもしれない。然し立場の相違というような説明は場合に
よっては一片の言訳けにもならないということも事実であるう。

そもそも、音韻における機能の要点は示差にあるといわれて
いるが、畢竟これは語義の判別を目的とするものであれば、その
ような意味で、音韻が文法体系に及ぼす影響も十分に考えられる
べきであろうし、事実解釈学的語義は文法学的意義の上にも少な

からざる役割を果していることは否定できないであろう。例えば
われ明日行かむ。 われ富者たらむ。

という二文に見るムなる語の意義を求めようとする場合、「行
か」「富者たら」というア列活用語尾から接続する形態的事実、
またはア列音の持つ機能、さらにはムの機能だけに把われていて
も、決して、推量、未来、意志というが如き文法的意義は生れて
こない。よしんば、アムというが如き仮想語をイ列甲類の語尾(四
段連用形相当)に接続させた形をもって説明を試みても、それは
漠然と時に関する助動詞であるかもしれないという底の意味を
循環論的に付会するだけであって、より集約され、よりの確な意
義を帰納することは恐らく不可能であろう。むしろ、この場合の
文法的意義は、解釈学的な文の内容全般に負うていることが多く、
例文でいえば、「明日」という未来時をあらわす語が「行かむ」
に先行してこれを修飾しているとか、更に内容的に「われ」とい
う主題は今「行く」という動作を起していないとか、また現在は
富者ではないというが如き内容の事実を前提にして決定したり、

あるいは他にムのあらわれた文においても同様の事実が観取できた場合にいよいよ確実に推量、意志というのが如き文法的意義が帰納され得るのである。

このような操作はまことに常識的で、極めて単純素朴な方法であるが、だからといって、これを全面的に度外視し、否定し、他に理論を駆せて見て、結局何が残されるであろうか。古代語の辞書の意味、あるいは文法的意義の研究において、このような方法を不可とするならば、殆ど破算に近いのが現状ではなからうか。

ここに述べるナリについて、専ら文法形態および機能の面から理論を構成することは、もとより推奨されるべき研究方法であろうが、結局形態については形態論、機能については機能論以上のものではないから、それには自から限度があり、そのみが的確な意義を導出する方法ではない。そのような意義は文内容即ち、解釈学的な意味（ナリの場合で例えるならば、聴覚表現の場合に殆ど使用されているという単純な事実）から抽出帰納されることが殆どである。つまり前例でムの意義を決定しようとする際、仮にアム説によって連用相当のイ列音からの接続を考察したとしても、それは他のキ・ケリ・ツ・ヌ等と共に時に関する語であるという程度の意義しか得られない。これをナリの場合でいうならば、終止形相当のウ列音を承接しているのは継起して起る一つの事象を感覚的に客体化して、指定したもので、指定のナリの用法の一種と見る解釈もできるわけであるが、それは全くムが時に関する助動詞であるとして説明する程度に粗大な意義づけでなければならぬ。

ここに更にナリに関する私案を取りまとめ、一往論を閉じようと思うのであるが、「上」の冒頭にかかげた「あらまし」の五以

下を次のように変更する。

五 補 説

六 聞 香

七 ナリとメリの消長

八 ナリとメリの対応

九 結 び

註1) 宮田和一郎 終止形に接続する助動詞「なり」（解釈五ノ

三・五・六・七・九）塚原鉄雄 活用語に接続する助動

詞（なり）の生動的な研究―王朝文学作品を資料として―（

国語国文二九九）木之下正雄 今昔物語におけるナリの表

記について（解釈三ノ八）宮城文雄 ふたたび終止形接続

の（なり）の意味について（徳島大学学芸紀要九）

2) 有坂秀世 音韻論増補版 三三四P

3) 大野 普 万葉時代の音韻（万葉集大成6 言語篇 三五P）

五.

ナリが聴覚に関連していることはも早疑いを入れられない事実であろうと思うが、ここではそれに関する自他の説を紹介して補いにしようと思う。三宝絵詞中十三置染鯛女の条に観智院本によれば次の如き個所がある。

女カナシヒテ云「此蝦我ニユルセ」トイフニ猶ノム。深クカナシフニタヘズシテ「蛇ハ如此云ニナムユルスナル」ト云テ「我汝カ妻トナラム。猶ユルセ。」ト云時ニ蛇タカクカシラヲモタケテ、女ヲマモリテ蝦ヲハキイタシテユルシツ（略註一七九P 句読、「」、傍線筆者補入）

傍線個所の「ユルスナル」はこのままでは連体承接のナリ（ル）

と見ることも可能であるから、「許すものだよ。」という蛇に對する一種の説得的立場が正しいとして、解釈する人もあるに相違ない。しかしこの個所を暫く他文献に徴するに、日本靈異記には

大蛇飲乎大蝦 詭大蛇日 是蝦免材 不免猶飲 亦詭之曰

我作汝妻 故幸免吾 大蛇聞之高捧而虐女而 吐蝦而放

(中八)

とあって相当する字面がない。今昔物語集では「山城国女人依親音助遁蛇難語」に

毒蛇有テ蝦ヲ吞カ為ニ追テ来ル、翁比レヲ見テ蝦ヲ哀テ蝦ニ向テ云ク 汝子其蝦ヲ免セ、我カ云ハムニ随テ免シタラハ我レ汝ヲ掣ト為ムト 不意ス騒キ云ヒツ蝦此レヲ聞テ翁ノ顔ヲ打見テ蝦ヲ棄テテ藪ノ中ニ遁入ヌ(十六ノ十六)

とあって、同じく相当字面を欠く。従つてここは三宝絵詞だけの潤色にかかわる所であらうと想像されるわけであるが、東大寺切を試みに見ると、

女閑那志^ニていは久こ乃かへる我にゆるせといふになをのむ

布か久か那^ニ布に堂へ須志て久ち^ニ那^ハは、閑久いふになんゆる須那るとききて和礼なむちのめと那らんをゆれせといふに

(□内原文に補入してある字面)

とあって観智院本の「云テ」が「ききて」になっている。前田本の字面は東大寺切に近似していることは已に指摘されている通りであるが、果して前田家本は「蛇如此云免聞吾為妻猶免云」とあって、「ユルスナル」が「ききて」・「聞」に關係のある語であることが明確になつて来る。即ちこの字面は東大寺切、前田家本がむ

しる正しいのであつて、観智院本は不純であることになる。意味は「蛇は次のように云うことによつて蝦を放免する」ということ(予ねて)聞いて(いて)」というようになる。このような關係を同じく三宝絵詞の中で拾つて見ると

我レ聞ク海ノ中ニ如意珠有ナリ(吾聞海中有如意珠)(一)(一)

内前田家本以下同じ)

汝カ山ニ入テ道ヲ行フナルヲ聞キテ(汝入山行道聞故来將供)

(上十三、略註八五P)

と同じ字面である。それは全く

我カ師ヲシレル俗三人路ニアヒテ、師ノモトヘモテユク物ナメリと見テ(志のもとへ毛てゆ久ものなめりとミテ)(持行師許物也見)(中十六略註一八八P)

の如き「見」字によるメリの対応と同じ關係にあるものとみななければならぬ。このような例は別に三宝絵詞を持つてくるまでもないことではあり、もちろんナリ、メリの字面は漢字の上にあらわれるべきものではないが、「聞・見」兩字に相應するものでは証拠としたまでである。これについて思い出されるのは書紀訓註の「聞喧擾之響焉此云左椰寛利奈離」(神武記)における「聞」字とナリとの關係であらうと思う。

さて漢文訓読用語として見た場合、メリは既に指摘されているように、その埒外に立つべきものであり、ナリはまま訓読用語の中に見られるという相違点を持っている。これは全くナリ、メリ兩語の位相上の異なりであり、その生い立ちの性格を示す所というべきであろう。法華義疏長保点にもそれらしいものがあることは既に遠藤嘉基先生によつて指摘された所であるが、(先生はこれ

を指定法のナリと見られた。) 中田祝夫博士の訓読篇にもそのような例が認められるようである。(詳細は博士によって紹介があるはず。) ここでは夙に大坪併治氏から御教示を得た、石山寺本大智度論天安二年点の例を恩借することにした。

摩訶迦葉の諸弟子 入王舎城一語諸貴人「知不。尊者摩訶迦葉今日入无余涅槃。」

諸貴人聞是語皆大愁憂言「仏滅度」

摩訶迦葉持護仏法今日復欲入

无余涅槃(卷三)

における「欲すなりといひき」の点は「欲」字の中下(き)左下隅(す)、右下隅(なり)、右上隅フ(といひ)の如く施されているといわれ、意味の上からも、人々(摩訶迦葉の諸弟子)の言を諸貴人がまた聞きにして、語っている所である。右の例は私自身からいえば「大智度論天安二年点に有リナリ」と表現しなければならぬ種類のものではあるが、要するにナリは漢文訓読文の中にもまま、殊に右のような対話文の中に、用いられているのであって、それは即ちこの語の正統な古さを物語っている所と見なければならぬと思う。メリが漢文訓読に余り用いられないのは中央にあっては、少くとも新興語であり、その位相がやや異なっていたものと解しなければならぬであろう。

そこで更に平安朝の歌学者や歌人がこのようなナリを如何に解

していたかを知る必要が生じるが、それには既に佐田智明学士の調査がある。即ち「永長二年東塔東谷歌合」の八番

秋ふかみよ風はげしむべしこそよもの里人衣うつなり(左) に対し判詞は「せめては衣うちけれとやよむべからむとぞみえはべる」とあり、その理由としては右歌が「衣もを打をききてよむならば、よ風も寒く吹なへにころも打也などぞよまれはべるべき」であるのに、そうでないから「衣うちけれ」とあるのが良いという旨のことを述べている。しかも右方の

夜もすから衣うつ也我ことやまたきく人もねられさる覽

を勝としているのである。つまり「ききてよむナリ」ということがいわれている事実は全く伝聞のナリを中古の歌人も認めていた証左になるのであって、佐田学士が「ききてよむ」を「なり」で示すのも王朝期の文語を伝えていると見られよう。」といはれた通りであろうと思う。これは既に佐伯梅友博士の紹介された平家物語巻六嗔声における

大納言拍子取って「信濃にあんなる木曾路川」と言う今様を、これは見給ひたりし間「信濃にありし木曾路路川」と歌はれけるとぞ、時に取つての高名なる。

の例より、時代も古く、かつ確定的な記事と見なければならぬ。

また八雲御抄卷一正義部の

一、同事の詞かはりたるは尤可為病 良弁与礼牟。京極御息所歌会勝。介礼与介留微子女御歌合中務持。良志与奈利寛和歌合 惟成爲持。或不病ども是等は病なり。准之多。

におけるラムとレム・ケリとケレ・ラシとナリが「同じき事の詞

かはりたる」即ち同義異音の語を指していることは論のない所であらう。歌人の言語感には特殊なものであって、必ずしも現代の語学的立場とは符合するものではないにしても、同じ条の末尾「准之多」の例として「山与峯」があること等をもってすれば既に疑いと挿む余地はない。このラシとナリは佐田博士も指摘している如く

鶯のなくねのどかに聞ゆなり、花のねぐらもうごかさ(まじ)し
寛和二年 歌合)

であるならば、万葉などでは珍しい形ではないが、これが平安朝に嫌われたいうことは、ナリがラシと同じような推量または推定の意味に固定化していたからではないかと思う。恣意的な想像や理論よりも今は素直にナリとラシが「おなじ心」の語として把握されていたことを認めるべき段階であらう。福田良輔教授のお説のごとく、ラシ(ラムも同じ)はいわゆる「摩き」のル・レのア列音(未然形相当)ラに形容詞的シク活語尾シ(または推量の助動詞ム)が膠着したものであって、原初的には強い推量を意味するものではない。つまり「根拠ある推量」と後世いわれる程にこのナリが「ききてよむナリ」といわれて、指定のナリと区別されて推定に用いられていたことを卒直に認めなければならぬのである。伝聞推定の意義は、用語こそ異なれ、決して近年に至ってはじめて付会されたものではないのである。かくて松尾捨治郎博士の業績は現代の語法、特に解釈学的な立場から、古い歌人の意識を再確認された形において正しいということになるのである。

ナリにおける紋上の如き、古代歌人の意識は、藤原定家にも十

分に備わっていたと見るべきで、かの土佐日記の冒頭

をとこもすなる日記といふものををむなもしてみんとするなり(青谿書屋本、三条西家本)

の一節を彼はさかしらに

をとこもすといふ日記といふ物ををむなもして心みむとするなり

と改め、歌学者としての「ききていふナリ」への言語意識を表明したと認めることは極めて自然であらうと思うのである。

ナリという語が「ニアリ」の約言ではなくて、ナ・ネ(音)ニ(ニよふ)ノ(告る)等の音声に関するナ行音のア列音ナに存在をあらわすラ変語尾リの膠着したものであらうことは既に述べたことがあるが、福田教授はその後ニアリの融合形のナリと成立過程を異にしたナリがあって、格助詞的ナにリが付いたと伝聞推定のナリを想定するというお説を提唱された⁵⁾。教授は伝聞推定の意義を原始日本語における接尾辞ナス(ノス)の意義に等しいものとされ、その語源を「成す」、「似す」とは別に、古形の格助詞ナ・ノを中核とするものと考えられ、その語基のナに接尾リがついたものとされた。いずれにせよナスの用例について上古の枕詞的な既に固定した修辭法を觀察すると

アシビナス(栄ゆ)・ウヂラナス(いはひもとほり)・ウミヲナス(なが)・カガミナス(み)・クモキナス(遠し)・サバヘナス(騒く・沸く・荒ぶ)・タマモナス(浮ぶ・寄る・騒く)・ナクコナス(慕ふ)・ホタルナス(かかやく・ほのかに)・ミカモナス(二人並びぬ)・ヤミノナス(思ひ迷ふ)

等があり、これに準ずるものに

ミナワナス・マタマナス・トキハナス・カキホナス・コヅミナス
等があり、その他

朝日・降る雪・真愛子・みつば・鳴沢・丹のほ・翔・霞・百重
・巖・錦・栖軽・水門・積麻・敷裳・引帯

等普通名詞について一般的修飾用語としてのサ行四段動詞ナスがある。ナスの右の如き例はともかくとして、この語が最もナリに近似している性格は活用語の終止形を承接している点にあると思ふ。

鳴る瀬ろに木都能余須奈須 いとのきて 悲しけ背ろに 人さ
へ寄すも (一四・三五八)

綜麻形の林の崎の野捧の きぬにつくなす 衣爾著成 目につくわが背 (一・一九)

等の例は今更挙げるまでもなからう。まことにこのようなナスは本居宣長も既にいっている「碁登久の古言」としてのナスで、いかにも「……のように」と用いるに適した語である。唯いわゆる「ききてよむナリ」として見た場合、用法が余りに広すぎるし、その点が必要しもナリの局限された用法と符合するものではない。右に掲げた例でも、

五月蝮奈須佐和久兒等 (五・八九七) 垣穂成人辞聞而 (四・七一一)
垣保成人之横辞 (九・一七九二) 垣慮成人之誹時 (九・一八〇九) 垣慮鳴人雖云 (十一・二四〇五)

等が、聴覚的要素を多少備えているかと想像され、津野地直一氏の如く「カキホナス」のナスを他のナスから区別し「鳴す」としておられる方もあるが、それにしても、他の用例から比べれば、

全く問題にならない。むしろ

朝日奈須目細毛 暮日奈須浦細毛 (一三・三三三三四)
久礼奈為能 一云爾能保奈酒意母提 (五・八〇四)

の如き抽象的な、むしろ視覚的な比喩が、キヌニツクナスやコヅミヨルナス等と共に、多く用いられている点は、聴覚的ナリと肌合の異なるものを感じさせるに十分であろうと思う。終止形を承接するナリが伝聞といわれる理由は単なる状態としての比喩ではないのであって更に局限されたいわゆる「ききてよむナリ」である点にある。わたくしは福田教授のリ語尾の高説に異を唱うる者ではなく、むしろこれを肯定する一人であるが、ナリの語源を格助詞の一般的用法において適用されたことに對しては紋上の如き理により、多少の疑義を懐かざるを得ない。

これを要するにナリはいわゆる「ききていふナリ」であり、漢字面からは「聞字に関連を持ち、その意識は遠く中古以来歌人歌学等いわゆる知識階級の人々には備っていたものであったこと、従ってその語源を考える場合には、ナ行系の音声に関連する語基に結びつけることを至当とすること、つまり「鳴る」、「鳴す」「なり」は親近関係の語であることを述べ、併せてナリが正統な古語であったため、漢文訓読語としてままた見られるのに反し、メリは漢文訓読用語としての用途が殆どなかったという位相上の違いに言及して本項を終る。

註1) 遠藤嘉基 いわゆる伝聞推定の「なり」について (万葉研究八・二P)
2) 佐田智明 中世歌学書に見える言語意識の性格 (語文研究

六・七号二九・三二P)

3) 佐伯梅友 奈良時代の国語一八五P 国文研究

4) 福田良輔 万葉集の解釈と文法上の問題点(解釈と文法2

・七二P) 古代日本語における複語尾の四段活「る」の一

考察(文学研究五九輯・一〇P)

5) 拙考 いわゆる伝聞推定の助動詞「なり」の原形について

(国語学二三・二八P)

6) 福田良輔 古代日本語における接尾辞「リ」について(国

語国文二九一号四五P)

7) 津野地直一 万葉集訓義私按二題(美夫君志創刊号二二

P)

六

ナリが「聞」字に関連することに因み、「聞香」という見出し
をつけたのであるが、いうまでもなく前項の延長として補説の第
二に当たる。

香を嗅ぐを必ず香をきくといふはもと漢字によりていへる詞な
り(松屋筆記五十五ノ三十九)

などと今更述べるまでもないことであるが、「聞香」という字面は
仏典や漢籍には屢々あらわれる。嬉遊笑覧には「嗅今鼻にきくと
いふは家語に芝入蘭室久而不聞其香即与之化笑などいへり」と家
語を引いているが、辞書類に徴するに

依稀笑還非笑 彷彿聞香不是香(元稹) 五里聞香(魏文帝与

朝臣論 稻書) 掃後更聞香(李商陰和張秀才落花有感情) 心

清聞妙香(杜甫詩) 播余香而莫聞(文選思玄賦) 見色聞

香(無量壽經上)

等その内外散韻文を問わず枚挙するに違がない。

「玉かつま一に

香を聞くといふは、もとからことにて、古の詞にあらず、すべ

て物の香は薫き物などをかぐといふぞ雅言にて(中略) 聞と

いへる事は昔の書に見えたることなし、今の世の人はそをばし

らで、香などをかぐといはむはいやしき詞のごと心得たるは中

々ひがごととなり、きくといふぞ俗言にはありける(卷七)

とあるのは漢事カラゴトの不可なる思想の混入が見られるが、「大言海」

には

聞香ヲ香ヲかぐト読ムベキヲきくト文字読ミニ誤リ読ミタル語

ナリトイフ。シカルニ聴覚ト嗅覚ト通ズルニヤ、今昔物語十四

ニ自動ニ丁子ノ香ハヤウきこえトアリ参考トス。

と見える。本邦における「聞香」の説明にはもともと諸書、今昔

物語集の用例を引用するのが常であるが、それはひとまず置くし

て、字書について見ると、康熙字典には不思議に「聞」字の条に

この義が見えない。「辞源」・「辞海」共に「嗅也」と見え、わ

が類聚名義抄では

聞文モム・キク 又去キコユ ホカラカナリ カク キコシメ

ス(観智院本 法中七五)

と見えている。訓点資料では金光明最勝王經卷六四天王護国品十

二に

我等天衆聞彼妙香(西大寺本5・10・最研乾一〇六P)

とあるのが、注意されるが、これを西大寺本の白点は「我等天衆

い彼の妙香を聞(が)む」と推読してあり、永長朱点では明ら

かに「我等天衆（い）彼（の）妙香（を）聞（か）ム」とカナ点で明示され、石山本は「我等天衆は彼の妙香を聞（か）む」とあって推説を出ない。また同所には

時彼仏聞此妙香（西大寺本6 最研乾一〇七P）

とも見られるが、これを古点では「時に彼の諸仏此の妙香を聞（か）ぎ）たまひ」とこれまた推説され、永長朱点も推説を出ないのであるが、石山寺本古点では「時に彼の諸仏此の妙香聞イタマヒ」とカナ点のイ音便形が示されている。さきに三宝絵詞の用例を掲げたので序でもって挙げると、観智院本下正月布薩の条に「クスリノ名ヲトヘハハナニカキテ皆弁フ」（略註二四二P）という箇所があり、前田家本はここを「問葉名聞鼻皆弁」という字面であらわしてある。即ち「聞」字を「カキテ（嗅ぎて）」に当てたわけである。

以上の如き「聞」字の訓から、大言海のいう嗅覚に関する表現は聴覚的な表現に近いものを感じさせる。それはまた

さつきまつ花橋の香をかげば昔の人の袖の香ぞする（古今夏三）
玉鉦の道のゆくての春風にたが里知らぬ梅の香ぞする（新勅撰春一）

梅が枝を折ればつづれを衣手に思ひもかけぬ移り香ぞする（後拾遺一春上）

等の「香ぞする」という所動詞（三上章氏に従う、いわゆる自動詞）の「す」を用いる性格も「音す」・「声す」等の如き、聴覚的表現と近似しているのである。されば

打ちわたす遠方人はこたへねど匂ひぞなる野辺の梅が枝（続古今一春上定家）

の如き嗅と聴の両方に掛けたいわゆる木歌取りの技法もあり得るわけであろう。

ともあれ「嗅ぐ」が「聞く」に混用されることは漢文の字面から当然に起りうるものであることを想像するのは常識に近いのであるが、今昔物語集は周知のごとく、そのような例の比較的早く見られる部類ではなからかと思う。今管見に従って、用例を掲げて見よう。

家女モ紫雲光リテ見其香ヲ聞ケムハ此ヲ思フニ定メテ罪人ニハ不有シ（十五ノ四一）多ノ狗共を以テ聞ス（中略）狗は鈴ヲ鳴シテ鼻ヲ土ニ付テ聞ツム寄ル（十九ノ八）
等は字面の上から「カギケム・カガス・カギツ」と訓んで差支えない所であろう。

船岳下ノ風水ヤカニ吹タレハ御前ノ御簾ノ少シ打チ動クニ付テ薫ノ香紀ズ馥ク。冰ヤカニ匂ヒ出タルヲ聞クニ御隔子ハ被下タラムニ比ク薫ノ匂ノ花ヤカニ聞ユレハ（十九ノ十七）
は「聞クニ」で良いとしても、「聞ユレハ」は如何にしても「カグ」を当てはめるわけにはゆかない。

火取ニ空薫スルニヤ馥ク聞エ（十七ノ三十三）
恐々ツ管ノ蓋ヲ開タレハ、丁字ノ香極ク早ウ聞エ（中略）香ノ艶ス馥シケレハ、木ノ端ノ有ルヲ取テ中ヲ突差シテ鼻ニ宛テ聞ケハ艶ノ馥シキ黒方ノ香ニテ有リ（三十ノ一）

等も同じである。むしろ同一箇所にもこのようにある字面に対しては、既に「碩鼠漫筆」等が指摘したように「キクニ・キケバ」と統一的に訓んでも宜しいとさえ考えられるのである。

但し「聞ユ」の字面には、これと近似の

香シキ香ユ(二ノ十六) 其ノ香遠ク香ユ(五ノ七)

等における「香ユ」があつて、日本古典文学大系今昔物語集一(山田孝雄博士他)ではカガユ(馨)(ヤ行下二段)とこれを訓んでおられる。この語はもとハ行下二段活用の「かがふ」から転じたらしいが、一往あてはめられ得る訓である。然し「聞」字に対して、そのような訓をあてはめることは、ハ行とヤ行の交渉の時期と共に、なお問題もあるであらう。ともかく

若人違シタラムハ極メテ不便ナルヘキ事カナト思ケル程ニ極ク娥キ香ノ急ト聞エケレハ(二十六ノ四)

安高近フ寄テ触道ニ、薰ノ香極ク聞ユ(二十七三十八)

等は勿論キコエ・キコユ(カガエ・カガユ)としか読めない。このように平安末には「香をキク」という表現が「香をカグ」と共に存し、それが和漢混交文の中などに散見するのは、もとより「聞」字のもたらしめた混乱と見るべきものようである。

さて以上の如き聞香の字面が示すように、不思議に匂いに関する表現にはナリを用いる場合が多く、又当然のことながらメリは用いられない。しかも歌の場合について見ると平安より後のものに多いことは、今昔の例などを参照して、偶然でないものを感じさせる。

軒の梅は手枕近く匂ふなり窓のひまもる夜はの風に(風雅一春上 尊氏)

うたたねのどこよをかけて匂ふなり夢の枕の軒のたち花(新統

古今三夏 延文百首歌民部卿為明)

にはふなり木のもとしらぬ梅ヶ香の便りとなれる春の夕風(新

葉一春上 後村上院)

宿ごとに花橘ぞ匂ふなる(匂ひける) 一木がすゑを風は吹けど

も(金葉二夏 公実)

この寝ぬる朝げの風にかをるなり軒端の梅の春のはつ花(新勅撰

一春 鎌倉石大臣)

以上五首の中金葉集公実の歌を除いては、寝ていて匂いを嗅ぐ意味の歌であつて、梅花や花橘を直接目視したものではない。この「匂ふなり」・「かをるなり」はいずれも伝聞推定のナリであつて、嗅覚的な反応を聴覚のナリを借りてあらわしたといへば牽強であらうか。金葉集の例は初奏本「匂ふなる」であつて「匂ひける」は再奏以下における訂正であるらしい。それらには多分、今昔におけるいわゆる「聞香」以後の作品の多いことを見ると、漢字面とは次元を異にしたと思われるような歌におけるナリの用法の中にも、あるいは「香をキク」という表現からの影響を全然受けていないとはあながちに言いきれぬものではないであらう。

そのような著しい例として散文にあらわれたものに堤中納言物語「このついで」の冒頭を思い出すのは自然であらう。即ち

はるもの(の)とてながめさせ給ふなるつかたたいばん所なる人々「宰相中将こそまゐり給ふなれ れいの御にほひいとしるく」などいふほどにつる給ひて……(三手文庫本による)

とある。この「まゐり給ふなれ」を連体形承接のナリと見るか、終止形承接のナリと見るか。ということは形態上では分明でないが、さりとて解釈上そのままに放置できない問題の個所であらう。「宰相中将がいらいしたのですね。あのいつものようにお召物の匂いが随分いたしますこと」(評釈清水…詳解同じ)は解釈文

の表現からはどちらにもとれて無難である。しかし連体形にナリが接続した形と見れば指定であるから「いらっしやるのです。」となるであろう。終止形にナリが接続した形と見て、仮に断定または詠歎とみれば、「いらっしやいますよ。」とでも訳すべきであろう。いずれにもせよ宰相中将のいらっしやる行動は既に表現され確認され、更には識者の好みに感じたい方をすれば、客体化されていなければならない。従って、この立場では「いつものようにお召物の匂いが随分する」ということはいい換えれば、「お召物に香の匂いをブンブンさせながら、入って来られた。」という現実の外ならないであろう。つまり「例の御匂ひ」として「参り給ふなれ」という構文と表現上大差ないものである。端的に言えば、宰相中将が中宮の時に「つゝい給ふ」に至るまで、台盤所の人々は始終それを眺めていなければならない恰好である。しかし清涼殿の西廂につめている女房たちとしては、そのような状態で在り得るものではなく、現実の言葉としてもまことに味気ないものである。しかし清水泰氏の右訳文「宰相中将がいらっしたのですね。」は実際見ていなくても確度の強い推定ならば、いい得る表現であり、少くとも現代人の言語意識からはそうも取り得るものである。そこでこのような訳文を離れて他に二三現代口語訳を眺めると

宰相中将さまが参殿あそばすようでは、何故って、いつものとおり御召物の匂いがはっきりと匂って来ますもの（現代語訳）
日本古典文学全集——松尾

参議の中將がおいでになつたらしい。例の御召物に燻いた匂が大層はっきりしています（新釈 土岐）

の如く「ようです」・「らしい」という推定の語をもって来て、直接に目視はしないが、「例のにはひいとしく（あること）」を以てその推定の根拠としているのである。

宰相の中將がどうもこちらへおいでなされるのである。いつもの（宰相中将の）御においが大変きわだつて来る。（詳解 山岸）

も、「どうも」という副詞を使用することによって、そのような状態を表現したものとと思う。一体、解釈文によってどの訳が最も適当であるかなどと検討することは不見識も甚だしいのであるが、しかもなお、解釈は択一性を尊ぶとなると、次のように決せざるを得ないと思う。即ち、「台盤所なる人々」としては直接宰相中将の姿を見ないで、その人を「聞き当てる」という所が、この文の眼目ではないかと思う。また台盤所にいる女房としては実際そのような状態にいるのが、場所がら自然ではないかとも思う。つまり比処は「台盤所なる人々」が匂いから推して、「宰相中将が参内したらしい」などといっているうちに、やがて当人が姿をあらわして、中宮の前に踞いたと見るのが妥当でなければならない。とすれば、「まゐり給ふなれ」はまさしく、「参内なされたようだ（らしい）」という解釈が適当してくる。そして、「なれ」は単なる表現上の便宜や都合ではなくて、古人のいった「ききていふナリ」のことであり、用法としては「聞き当てるナリ」であるわけである。従って「給ふなれ」は終止形「給ふ」にナリの已然形ナレが接続した形、つまりは八雲御抄のいうラシに当るナリということになる。

以上述べ来た如く、いわゆる嗅覚的なナリにおける推定とい

う後世的な変用現象については次の二通りの見方が生ずる。即ち
1 聞香ともいうから、カグをキクに準じて、このような用法が認められなければならない。

2 そのような漢字の訓読とは別に、伝聞のナリがラシと同じ心と見られていた事実を鑑み、意味が抽象化して、用法が拡大された。

のいずれかであろう。わたくしとしてはこの両者を総括的に認める立場であるが、その主因は2に置きたいと思う。しかし用法の拡大ということは無限の広さを持つはずであるが、猶ナリの局限された用法を考慮した場合1の「聞香」説を捨て難いものにある。即ち、1は2の制御的副因としての価値を担い、前掲数首の和歌等と共に平安末以降の後世風な様相を呈したナリを認めなければならぬのである。つまり、形態上たとい連体・終止いずれの接続であるか、不明のものの中にも多分に終止形承接のナリが混在する場合が多いのではないかと思うものであって、伝聞または、推定という定義は単なる訳文表現の便宜や都合とかいう、いい加減なものではなさそうである。

註1)

勝宝四年本国便適聘于唐業行乃説以宿心遂与弟子二十四人寄衆副使大伴宿称古麻呂船帰朝於東大寺安置供養千時
有勅校正一切経論往住誤字諸本皆同莫之能正和上諳誦多

下雌黄又以諸藥物今名真偽 和上一以鼻別之無錯失

(統紀卷二十四天平宝字七年五月戊申)

2) 今昔物語集一(日本古典文学大系)(補註二八七・四六)

以下本論を急ごうと思う。ナリとメリとの関係については、既に富士谷成章が

何めり 何は事の末脚也、大かたなりとよむに似ていささかたがふべし。なりはちかく見きくことをさだかによむ詞なり。めりはそのおほむねをおしはかりてつかねいふころあり、(あゆひ抄卷五、十二身畔利)

と対照的に観察しているのを始めとして、この影響を受けたと思われる中島広足も

めりはなりとおなじ意なるもあり又やうすといふやうの意におぼめきいへるもあり(檀園隨筆全集番号二四五、二篇・二三九P)

と見え「玉霰窓の小篠」引用百人一首改観抄本居翁書入にも「めりはなりに同じ」と見える。石川雅望も雅言集覧の中で「めりはべしと云心にて推量りにも云、又なりといふ心にもいふ也」と言ったのと対比すれば、江戸末期の国学者系の考察の中には確かにナリとメリを関係づける傾向が存したことになる。山田孝雄博士も日本文法講義の中でナリとの類似について考慮しておられたものようであるが、形態的には平安朝文法史における取扱いがそれを裏付けているものようである。即ち

「べし」・「めり」・「らし」の三は上なる用言が連体形において「る」音を有する時はその「る」を省きて、その語幹より直に接するをこの期の特徴とす。この特徴は主として純粋形式

用言にあらはれ、又その形を有する複語尾にあらはる(中略)かくて又かかる類似の現象は純粋形式用言の第四種の「ナリ」の上にある用言においてもあらはる(以上二五六P)

と述べられた。この中でラシに属する類例には今日問題のものもあるが、メリとナリについてはその接続法がベシの場合より更に一層近似していることは一見して明らかである。即ち山田博士の用例に従えば、アリ・カリ・ナリ・ザリ・タリ・ベカリ・マジカリの七例について、メリとナリの接続例が挙げられている。ベシはアリ・カリ(形容詞補助活用語尾)のみを共有している。その上に活用形が未然形・命令形を欠く点で一致しているから、この二つの形態上の特色についてもメリとナリとの性格上の対応を考えて見る価値は十分に存すると見なければならぬ。

しかるにナリとメリを聴覚と視覚の相對應する語と見た場合にその用例は生起する場面によって当然異なる筈であつて、これを全く条件の等しいものと見て、その出現の頻度を比較して消長を論ずることは元々無意味である。この事はナリの意義を断定あるいは味歎の一本に見る立場においては更に一顧の価値だにない事となるであらう。しかしわたくしは次のように考えて敢えてこの二つの語の出現頻度を数値的に出して見ることにした。それは、従来メリとナリの頻度は余りに個別に数えられ過ぎていたのであつて、一語の使用頻度を一つの文献について機械的に挙げて見ても決して、その消長を客観的に把握される資料とはなり得ない。むしろ形態的に更には意味上に近似した語を比較して相対的に觀察することは、多少なりとも個別的觀察を補い得るものであると考へるものであり、結論的にはそれは決して無意味な所作とはな

らないと思うのである。ともかく次にその消長を示す文献を示し数値を比較して見よう。まず散文では山田博士の説くところに従い撥音尾における接続形を数値の上から見た。

(第一表) (*印は索引による。()内は終止形接続)

文 献	用 語	
	ナリ	メ リ
*土佐日記	4	{0 (1) (1) (3) (2) (4) 13
*竹取物語	5	35
*伊勢物語	2	18
*伊勢物語	2	21
宇津保物語	3	14
源氏物語	7	60
*末摘花	2	9
*和泉式部日記	2	14
*更級日記	9	78
中納言繪詞	1	4
大納言繪詞	60	78
大三繪詞	9	4
今昔物語	40	119

散文では、既に指摘されている通り、対話文の中に最も頻出する傾向があるが、今は簡略に總べてを包含してその概略を眺めると、大体平安朝以降につれてメリが勢力を得て、逆にナリの頻度を凌駕するに至った次第が一往了解できようと思う。しかるに和歌ではナリが依然有勢であつて、既にいわれている如くメリが歌語として余り生長しなかつた状態を知ることができる。今八代集において、ナリは終止形接続の明確な例のみを数値の上からとり、これをメリの数値と比較して見ると第二表の如くなる。(次頁)ナリメリは口頭語として対話臭の強いものであるため、歌語としての用法は消極的であつたと見るべきであるが、それでも正統

(第二表) (国歌大観による)

用語		ナリ	
		ナリ	メリ
八代集	今	3	4
古	撰	9	6
後	遺	8	4
拾	遺	11	1
後	葉	8	1
金	花・載	1	0
詞	千	18	3
千	新	14	3

の古語であるナリは有力に用いられている。殊に右表ではナリの場合の頻度を確例のみに制限してあるため、実際はメリと対比して更に有勢なはずである。つまりここにおいても漢文訓読の場合と同様に位相上の相異が十分に伺えるのであって、特に散文においてのみ、比較的その消長の経過が観取できるわけである。しかし数値は何といつても機械的に単純な結果であり、叙上の如く位相上の異なる、また使用場面の元来異なる二語を比較して見てもその確度の甚だしく劣等なものであることは言うまでもない。また底本に対する異同も考慮に入れなければならないから、この段階ではまず大まかに言語の消長の程度を掴み得ればそれを以て僅かに満足すべきものと考えただけである。

そこでナリとメリとの消長には、もう少し具体的な例をもってその実態を把握して補足する必要があると思う。例えば四段動詞「言ふ」にナリが接続して「いふなり」となった形式がある。この場合も連体・終止両形のうちいずれを承接したものか、形態的

には明らかでない。しかしこの語は人が音声を発する動作を意味しているがために、それを相手の動作として表現する場合には当然終止形承接のナリと考えるべきであり、伝聞説支持者は従来そのように、この接続形を取りあつかってきた。事実平安朝前半期に相当する作品の中では「いふなり」は一種の熟語の形態をさえ帯びている。

土佐日記の場合にしてみると、
かくうたふにふなやかたのちりもちりそらく雲もただよひぬ
とぞいふなる(十二月廿七日)

しもだにもおかぬかたぞといふなれどなみのなかには雪ぞふりける(一月十六日)

国よりはじめて海賊むくいせんといふなることを思ふ上に(一月二十一日)

からうたに日をのぞめばみやことほしなどいふなることのおさまをききて(一月廿七日)

をとこともひそかにいふなり(二月八日)

うりひとの心をしらぬとぞいふなる(二月十六日)

の大例があるが、特に引用句を受ける場合が目立つ。ナリが活用語を承接する場合の他の例を拾ってみると

※すなり・するなり(十二月廿三日) 住みけるなり・立つる事
・思はずなり(一月七日)とがむるなり(一月廿一日) 玉とぬかぬなりけり(二月三日) 仰せたふなり(二月五日) 行かぬなり(二月五日) 言へるなるべし(二月七日) 荒れたるなりけり(二月十六日)

備考 撥音語尾承接のものには除外

※印は終止形承接と思われるもの

等雑多な形を示しているのと極めて、対照的である。そして他に
ま

をこたちは心やりにやあらんからうたなどいふべし（一月十
八日）

きく人のおもへるやうなぞただことなるとひそかにいふべし（
二月一日）

の如き「いふべし」といふ推量形が交っていることを考えると、
「いふなり」が同じような推定・推量の意を持った「ききていふ
ナリ」であって、終止形承接であることの可能性がでて来る。

しからば「言ふ」にメリが接続した形は如何というに、原則的に
は有り得ないわけで、事実竹取・伊勢・大和等中期以前の作品に
は用例にも「いふなり」はあっても「いふめり」はない。しかる
に源氏物語になると「いふめり」という接続形に接することがで
きる。

少納言の乳母と人いふめるは（若紫）
酸漿とかいふめるやうにふくらにして（野分）

直人の限なき富といふめる勢にはまさり給へる（東屋）

国に匂へる紅の色に取られて香なむ白き梅には劣れるといふめ
るを（紅梅）

宿世などいふめるもの更に心になはぬものに待るめれば（総
角）

これやげに人のいふめるのがれ難き御契りなりけむ（総角）
などか今日も日たけてはといふめれば（宿木）

等は湖月抄本を底本として、河内本と余り抵觸のないものについ

て、管見のまま列挙してみた。もとより

極楽といふなる所には菩薩なども皆かかる事をして天人なども
舞ひ遊ぶこそ善かなれ（手習）

人げ遠き心地して物怖しといふなれば、長押のしもに人々臥し
て答すなり（葎木）

御年ひきいでよなどいふなり（葎木）
御道あらはなりといふなり（空蟬）

誠にその人かよからぬ狐などいふなる物のたはぶれたるか（若
菜下）

下衆は僻言もいふなり（蜻蛉）

の如き「いふなり」の形も猶有勢であるが、兩者の間の数値が明
らかにいえないのは、後述の如くこのナリがメリと交替する現象
が見られるためである。一方連体承接とも見られる

まだをさなくなりあはぬ人をさし越えてかくはいふなるべしや
（東屋―河内本）

心の中に思ひはばかる様ありてよかなりといふなりけり（落窪
二）

等の曖昧な形もあり、和歌にも

秋の夜を長き物とは星合の影みぬ人のいふにぞありける（後拾
遺四秋上）

白雲の九重に立つ峯なれば大内山といふにぞありける（大和物
語）

秋ふかみ恋する人の明かしかね夜を長月といふにやあるらむ
（拾遺 九推下）

の如き例が出ていることを思えば「いふなり」という形が意味不明

に陥った経緯もわかるというものであろう。

ともかく、源氏物語の頃になると、四段動詞を承接するナリは、接続形態が、終止連体のいずれであるか、判別困難であるため、混乱しやすく、特に終止形接続の場合にはナリの代用として新興語メリが入りきたり、従来のナリと同じ意味機能を發揮することになったと見るものである。つまり終止形接続のナリは上位語の撥音尾に接続して熟語化したもの、および終止連体両語尾の判別可能な二段・変格等の活用動詞、またはそれに準ずる活用語尾の場合のみ用いられたが、四段・一段等の活用言はそれが不明であるため、ナリを以てすべき、聴覚的表現の場合でも往々メリを借用したわけであらう。ここにおいてナリとメリは聴覚とか視覚とかいう表現性を離れて、推定という抽象化した意義を持つことになり、更には指定・断定とまぎれやすいナリは勢いその地位が不安定になってメリの介入を許すこととなったものと考ええる。このような通時的現象は用語の保守性、特にメリの用法に消極的な和歌の場合にも見られることは注意されてよい。

徒に度々死ぬといふめれば逢ふには何をかへむとすらむ（後撰十一恋 源信明）

埋木はなか虫はむといふめれば久米路の橋は心してゆけ（拾遺十九雑恋）

羨まし花や蝶やといふめれど皮虫くさき世をも見るかな（堤中納言物語虫めづる姫君）

等はその一例であるが、古今集当時では

思へ共思はずとのみいふなれば否や思はじ思ふかひなし（十九雑詠人不知）

桜花ちりかひ曇れ老いらくのこむといふなる道まがふがに（七賀）

陸奥にありといふなる名取川なき名とりては苦しかりけり（十三恋三）

住吉と蟹はつぐともながるすな人忘れ草おふといふなり（十七雑上）

罪もなき人をうけへばわすれ草おのが上にぞ生ふといふなる（伊勢三十一）

名にしおはばあだにぞあるべきたはれ嶋波の濡衣きるといふなり（伊勢六十一）

もちろん「いふなり」の一本であったし、それがまた、土佐日記においては「いふべし」に似た表現であったのに対して

年をへて花の鏡となる水はちりかかるとをや曇るといふらむ（一春上）

吹くからに秋の草木の妻るればむべ山風を風といふらむ（五秋下）

あまの住む里の知べにあらなくに恨みむとのみ人のいふらむ（十四恋四）

梅の花咲きての後ののみなればやすきものとのみ人のいふらむ（十九雑）

における「いふらむ」とも一脉相通う表現であることを考慮に入れるべきではなからうか。

以上の如く、ナリの意味の不鮮明さが、次第にメリの勢力に蝕まれていった経過を思うと、さきに掲げたナリとメリの使用頻度に関する数値の実状が少しは判明してくると思う。しかしこれと

ても、なお絶対的なものではない。例えば後撰卷一冒頭に近い
宇多院に子日せむとありければ式部卿のみこを誘ふとて

行明親王

故郷の野へ見に行くといふめるをいざ諸共に若葉つみてむ(定
家・浄弁・仮名本メル。但し国歌大観ナル(イ)とある。)

の「いふめる」は異本「いふなる」とあるから、写本によって、
メリとナリとの交替現象が見られる。もちろん本来ならば「いふ
なる」にありたい所である。この事は古今集の写本にも出ていて、
わがいはほみやこのたつみしかぞ住む世をうち山と人はいふな
り(元永本いふめり)(巻十八 喜撰法師)

おもへども思はずとのみいふなれば(女本いふめれば)いなや
おもはじ思ふかひなし(巻十九)

の如く写本によってナリとメリが交替しているのである。源氏物
語にも湖月抄本で

これは世の人のいふめる怖しき神ぞつき奉りつらむ(総角)
が河内本で「いふなる怖ろしき神などやうの物ぞ云々」となつて
いるし、

故姫君は宮の御方さまに、我は母上に似奉りたるとこそは古人
どもいふなりしか(東屋)

は反対に河内本が「いふめりしか」となっている。ともかくこの
ような交替現象こそ、メリとナリの語性の近似を裏付けるもので
あると思う。「いふめり」は「なり」に同じ」と見た江戸末期の語
学者の言も味うべきであるが、ただ彼等がナリの真意を如何に解
していたかは問題としなければならぬであらう。

註1) 松尾捨治郎 助動詞の研究 一三四P

八

今はナリとメリの交替現象を「イフナリ」・「イフメリ」の場
合に限って二三見たのであるが、本節では用例を「言ふ」以外に
拡張して、考察しようと思う。既に「上」の部において一部用例
を述べたが、現にその視聴覚の対応として掲げた

竜田川もみち乱れて流るめり渡らば錦中や絶えなむ(巻五 秋
下)

難波なるながらの橋もつくるなり今は我が身を何にたとへむ(巻十九 誹諧歌)

の後歌、即ち「つくるなり」という聴覚表現のナリが元永本では
「つくるめり」であつて、交替現象が見られることは、このナリ
が終止形承接のものとして争うべからざる証となるわけである
が、先述の「人はいふめり」の例と共に元永本が平安朝の流布本
としての性格をメリを好んで用いた点にあらわしていると思てよ
いであらう。因に古今訓点抄(嘉元三年)にも

ナカラノハシモツクルメリ 私追記ナリ證本如此

とある。「ツクルメリ」が存した証拠になる。片仮名の字面では
ナとメの字体のまぎれやすいことも関係しているのであらうが、
今昔物語集でも、丹鶴叢書本によれば

相知レル者共ノ云ケル様近來海ニハ海賊多カナリ(カメリ)其
に可然兵士モ不具物ヲハ多船ニ願テ上給クハ(二十八ノ一五)
神ノ來宣フ事ナナリ(ナメリ)ト然ル程ニ娘達に近付キ給ヒニ

ケリ(三十一ノ三四)

の如き校異が書き込まれている。前に用例を挙げた堤中納言物語にも

八条の宮になむ知りたる者候ふなれども殊に若人あまた候ふまじ(ほどの懸想)

では宗固自筆本「候ふめれども」なっている。このような雑多な後世風な用例を前序として、以下源氏物語の流布本の一つ湖月抄本(青表紙)と河内本系においてナリ・メリの校異の顕著な例を、管見に従って二三挙げて見る。底本は湖月抄本、河内本は()によって挿入する。

阿闍梨などにもなるべき者にこそあめれ(あなれ)行ひのらうは積りておほやけに知ろしめさざりける事(若紫)

源氏が禁中に参り、北山の聖のことを帝に奏上し、それについての帝の詞である。河内本の「あなれ」が理論的には正しい。

心恥かしういたり深うおはすめる(おはすなる)御あたりには憎げなる事漏り聞えばいとなむいとをしう忝かるべき(楨桂)

六條院における源氏を噂するという北の方をなだめる鬚黒の詞である。原文のままに不都合はないが、河内本のナリに従えば噂である点が強調される。

もて離れて人の推し量るべかめる(べかなる)筋を心清くもあり果つべき誠の父大臣も(藤袴)

地の文で玉鬘の心情を絞する所も底本のままでも通ずるが、「べかなる」にすれば、「世人が疑いをかけていると聞いている方面を」となって、自分に対する世人の噂という意味になる。

いづ方にもなめげに許さぬものにおぼされたれば、(おぼし

たなれば)いと傍痛くて(竹河)

薫に対する玉鬘の詞であって、弘徽殿と秋好中宮への思わくである。底本のままでもよいが、河内本の「おぼしたなれば」であれば、「お思いになったというので」となって、人から噂に聞いたことになる。

宮はしぶしぶに思して、うちわたりにもたすきがましき事に御心を入れて、御門ささいの御いましめにしづまり給ふべくもあらざり(あらざなり)(総角)

薫の供なる人が山居の女房等に語る詞である。匂宮が浮気をやめそうもないという推定であるが、供者としてはメリで表現すると自分自身の思わくのように聞こえて穩やかでない。人伝てに聞く河内本の「あらざなり」が適當である。

遂にはえいなび果てじと思しつるを思いのほかなる事いで来ぬべかめり(べかなり)とねたく思されければ(宿木)

夕霧の心情であって、六の君を薫に娶らさねばならぬと思つていた所が、薫が女二宮の婿になろうとする意外なことが起りそうだとこの意味である。河内本の「べかなり」であれば、先行の「かかることを左大臣の聞き給ひて」が効いてくる。

この君は人がらもめやすかなり、心さだまりて物思ひ知りぬべかめる(べかなる)を人もあてなりや。(東屋)

浮舟の母の娘浮舟に懸想する左近小将への思わくであって、「めやすかなり」に相応ずるものとすれば、河内本「べかなるを」が合理性を持つことになるが、それほど厳密に考えなくてもよいかもしれない。

うち捨ててわたらせ給ひなば、いと心細くなむ侍るべけれど、

かかる御すまひは心もとなくのみ見奉ると嬉しくも侍るべかめるかな（べかなるかな）（浮舟）

弁尼自身の事のように考えられ、用法としては珍しいが、「都遷り」という主語を補って、「都遷りが私には嬉しう（ございますと）見えませう」とでも解釈すべきか。あるいはメリの自己の動作状態にまで拡張された後世的変用と見るべきか。河内本「べかなる」も変用にかわりなく、意味は「都遷りが聞くも嬉しうございます」でも取るべきであろう。

「いづらくそたちことを取りて参れ」といふに、それなめり（それななり）と推し量りに聞けど、いかなる所にかかる人いかに籠りたるらむ（手習）

中将の心情である。「あさましきわななき声」で老母尼であることを、それと推定している。河内本「それななり」が合理性を持っている。以上は底本たる湖月抄本のメリが河内本ナリである例であったが、反対に湖月抄本ナリで河内本メリの例もある。既に「いふなり」・「いふめり」の条で引用した例は除外してよろづの事足らひて、めやすき朝臣の妻をなむ定めざる（定めざる）はや、さるべき人えりて後見を設けよ（東屋）

常陸介へ少将を紹介する媒人口の中の勅言である。「まだお前は妻を持たぬということじゃが。」流布本のナルで無理ない所である。

さて以上一瞥した校異（この他にも細部に亘ればいくつかの例があるはずである。）において、流布本たる湖月抄本と河内本のどちらが原典に近い姿であるかということは、遽かに決するには、余りに問題が重大過ぎるが、むしろ流布本に見る如く、メリの克

った用法が源氏物語制作当時の実状であったかも知れない。既にメリの意味が単なる推量乃至推定にまで抽象化して、ナリに交ぜし始めた過渡的現象として、このような在り方は自然であると思う。そのような観点では、河内本におけるナリ・メリの使い分けにはかなり知識的作爲がなされたものであって、河内本自体における「さかしら」と従来いわれていたその合理的性格を反映するものとして、興味ある現象と見なければならぬであろう。しかしてメリナリはナリメリよりも用例が多いという事実も、河内本が平安朝におけるナリメリの傾向を是正しているという意味において重要であると思う。

以上の如きナリ・メリの交替現象も両語の性格の近似、更にいえば、あゆひ抄のいう「大かた（なり）」とよむに似ていささかたがふべ」き所のメリでなければならぬわけであるが、江戸末期の学者のいうメリに対応すべきナリの性格はいかなるものであったか。松尾捨治郎博士が「富士谷がめりに比較したこのなりは終止の下のみか指定のなりか或は之を一括した者か不明である。」といわれた通り¹⁾、問題はそこに帰着するのである。恐らく成章のいう「（なり）」は近く見聞く事を定かに詠む言葉なり。（めり）はそのおほむねをおしはかりてつかね言ふ心あり。「の」一定かによむ」と「おしはかりてつかね言ふ」とは相對應して、それぞれ今日的文法の意義用語をあてがえば、断定と推定に相当すべき筋合いのものであろう。つまり、やや杜撰な表現ではあるが、「ナリを以て断定的にいふべき所を、ややばかして推定的に表現するのがメリである。」と解することができる。成章はここで「末なり」つまり口語訳における「ハイ」を含めてやや曖昧な表現

をしているように思える。従ってナリとメリとの対応は今日迄概ね断定と推定との対応であり、その両者の間の一致点を咏歎という極めて便宜的な意義によつて調和を保たせてきたものようである。当の松尾博士さえも、メリとナリの類似点を認めることを推奨されながら、メリの原義を「思ひあり」とされたがために、その間における決定的な解釈を得られなかったものと思う。またメリに対して、「見アリ」の如き視覚的表現であることを認めても、ナリについては単なる断定または咏歎と解し、あるいは広い感覺全体からの客体的指定（断定の一種）と見る向きが多かつたために、結果的には推定と断定との対応というのが如き見解を示された人が多いようである。

実はそうではない。ナリとメリとの相関関係は聴覚的表現と視覚的表現との対応であり、それは感覺を通して推定するという精神現象を担っている点において共通なのである。このようなむしろ単純な事実に立つてこそ、その間に類似点も把握でき、また相異点に關する解釈も合理性を帯びて来ると見られるのである。右に掲げた校異上にあらわれたメリとナリとの交替は推定と断定の対応関係ではなく、問題は視覚的に表現しようか、聴覚的に表現しようかという点に集中されているのであって、それが畢竟今日といわゆる推定というのが如きかりそめの文法的意義づけにおいて近似点を見出しているものと考えなければならぬ。

土佐日記二月五日の條に

かちとりまたいはいくぬさにはみころのいかねばみふねもゆかぬなり
なほうれしとおもひたぶべきものたいまつりたべといふ

とあるが、定家本が「ゆかぬなり」を「ゆかぬめり」にして、更に「め」を見せ消ちにしたのは、そこに何等の錯誤があつたにせよ、ナリとメリとの関係を考慮に入れた場合、単なる偶然とは思われないふしがある。定家は日記冒頭の「すなる」を「すといふ」に改めた程にナリには神經質であつた人である。

註1) 松尾捨治郎 助動詞の研究 一三四P

2) 中田祝夫・竹岡正夫 あゆひ抄新註 三三三P 三三五P

頭註

九

前稿(上)以来やや長い時間が経過したため、小考にも少なからぬ変化が生じている。いまそれらを補訂しつつ結びに入ろうと思う。まずメリの語源については便宜上

従つて辞としての「めり」は「みあり」の融合であると説明するよりも視覚的なメという語根にラ変の活用語尾がついたものと説明しておきたいのである。(本誌五十六輯四八P)

という表現をしたのであるが、福田教授もお述べの如く、ナリ・メリ共にそのような原始的な語構成の段階で成立した語と見るのがむしろ正しいと考えられるから、今は語以下の語根と語尾による語構成を第一義的なものとして推したい。聴覚表現のナリはいずれにせよ、語単位の熟合による断定辞ナリ(ニ+アリ)よりも古い形成であつて、語の系統が違ふことに変りはない。また

確認から推量への順位は強いといえば、「見ゆ」・「(と)聞こゆ」・「(と)見る」・「(と)聞く」の序列をなし、助動

詞の「なり」は「(と)聞こゆ」に應じ、「めり」は「(と)見る」に應ずるものを考えられる(本誌五十六輯四八P)

と述べたことも、やや語義に拘わりすぎた嫌いがある。特にメリは「(と)見る」に應ずると考えるよりも、やはり「(と)「見ゆ」に應じたものと受け取れる場合があり、そこに推定の深淺があるわけであるが、特に上代の原初的用例では

潮瀬の波折を見れば 遊び来る鮪が鱸手に妻立てり見ゆ(顯宗記)

と東歌の

をぐさ男とをぐさずけ男としは船の並べて見れば平具佐可知馬利(十四・三四四五)

の二首を並べて見れば、「…見れば—終止形+見ゆ」・「…見れば—連用形+めり」(この場合の接続法はラシと共に東歌特有の例と見る通説に従う。)の対応から、そのことがいえてくるのではないかと思う。

因みに「…を見れば—見ゆ」の定型に対して「…を聞けば—聞こゆ」という定型が殆ど見られないのは、顯著な相違であるがそれは全く、聴覚と視覚の器官構造の差異と、吾人の生理的精神的負担意識の差異に依るものであって、聴覚における「聞くこと」はそのまま「聞こえること」に連なり、その間に通常生理的精神的努力を払うことを必要としないからである端的にいえば、聞こうとしないでも、総べてが聞こえるのが普通一般の状態である。しかるに視覚における「見ること」「はそのまま」見ること」にはならない。見る対象を取り違えれば、目的のものは見えないし、また努力して探して見もしなければならぬ誤である。たとい見るべき対象

が見えても、それに副在する環境、諸種の動作、状態等が複雑に組合わされた現実として認識されるのが通常である。但し見たくなければ、目をつぶりさえすれば総べては見えないのである。このような聴視両感覚における生理的心理的相違点が、言語表出としての文構成の様式を多少換えていることは注意されてよいと思う。つまり「聞く」と「聞こゆ」との落差は「見る」と「見ゆ」との落差ほど内容的に大ではない。ともあれ、「上」に述べた如く「…と聞く」・「…と聞こゆ」よりも「…と見ゆ」の方が認識

の表現としては遙かに現実的である。このような相違点が、いみじくも原始的用法のナリとメリの意義の相違を示しているし、更には推定辞としての用度の上に重大な結果を将来示したことは否定できないと思う。メリの本義は推量の意の極めて薄い「…見ゆ」であり、そのような視覚的特殊表現が、一般化して錯覚的表現としての「…と見る」(従来の仮想的複合語ミアリVメリの説による意義に近い。)に一往近づき、更にナリの聴覚的表現と共に推定辞として意義が抽象固定化して対等の地位に立ち、やがて、メリがナリを凌駕してその領域を侵し、優位に立つに至ったのが平安中期(十世紀中葉)頃の状態であつたろうと思う。

ナリとメリが言語位相の上に、多少のひらきのあつたことは已述の通りであるが、それにも拘らずメリがナリの領域を侵した要因については、次のようなことが考えられる。

1 視覚は聴覚に比し、本来的に広汎で優位な官能であるから、それにもとづく言語表現も用途が大になる傾向を有すること。

2 ナリもメリの、視聴の感覚表現をはなれて意義が抽象化す

る傾向にあり、特にメリは時人の嗜好に適し、その傾向が著しかった。

3 平安朝の初期から起った、断定のナリ(ニアリ)による連体承接の指定法が、伝聞のナリの終止承接の形態と混乱しやすかった。

等である。1 についてはメリが「まま恨めしと思ひ聞え給ふべかめり」(総角)・「手習などをやり給ふなめりと思ふ」(浮舟)の如く、思考一般の推量に用途を拡張していることなどその一例であろう。2 に関してはナリ・メリ両者が中期以後地の文に用いられる傾向が強くなったことあるいはメリが自称主語に応じた形跡を有することなどもその一斑であろう。3 に関しては中央アクセントとして、指定のナリは恐らく平上型、伝聞のナリは上平型で、音声上からは区別があった時代も想像されるが、実際はそう厳密に使い分けられたかどうか疑問である。ともあれ、伝聞のナリは主として「はべナリ・べかナリ・ざナリ・なナリ・あナリ」等う変接音尾承接の熟合形に、あるいは二段および変格活用語尾に、面影を残し、その他にはメリが好んで用いられたともいえるのではなからうか。例えば

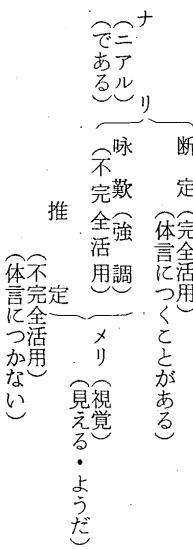
(帯木)

の如き和歌にあってさえも、ナリとあるべき所にメリが用いられているのである。³⁾

已述の如く、院政・鎌倉期にわたる歌学書乃至歌合せの判詞に伺える「ききてよむナリ」即ち伝聞のナリ(永長二年東塔東谷歌合)と、「同じ事の詞かはりたる良志与奈利」即ち推定のナリ(八

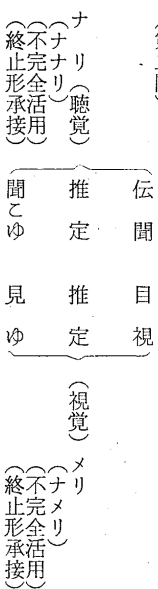
雲御抄)の観念は中古以来の歌人等の歴然たる意識に存したと見られるから、このようなナリに関する原則のもとに成立した作品についても、同じような意識の上に立っての解釈が必要であり、この態度を否定しようとするならば、そのような古の歌学者の言の荒唐無稽なることをまず証明しなければ論理として正しくないと考ええる。しかしてナリとメリとの関係は断定と推定との関係ではなく、共に、聴覚あるいは視覚を通しての推定であるという点において対応しているのであって、この点に関する見解は従来いずれの説も曖昧であったと思うものである。仮に図示すれば、断定と推定との関係と見た場合には第一図の如く、

(第一図)



不均衝な吻合しない点が出てきて、対応が完結しない。しかるにこれを聴覚および視覚における対応と見た場合には、第二図の如く井然とした対応関係が生ずる。

(第二図)



但しこのような恣意的な図表における整・不整をもって、理論の正当さを裏付ける資料としようとすることはなく、理解の参考として企図したまでであることも申し添えなければならない。ただし合理性は第二図において、遙かに容易に観取されることは何人も疑いを入れないであろう。第一図が複合語ナリと、原初的構成語（語基と語尾による構成語）メリとの対応なるに對し、第二図において共に原初的構成語たるナリおよびメリとして対応させた点は、より合理的な把握となるものと思う。さはあれ、視覚的表現のメリは意義の抽象化によって初めてナリの領域に喰い込んだわけであるから、その時機においては、厳密にはも早視覚的表現と聴覚的表現の対立観念は消滅していた場合もあったであろう。しかし、ナリとメリとの関係を対照的に觀察し、その消長を通時的に調査することによって、終止形接続のナリの真義およびその生態は自から解明されなければならない。あえていおうナリとメリとの関係において視覚的表現は聴覚的表現を凌駕した時期があった。

—一九六〇・九・三〇—

註1) 塚原鉄雄 活用語に接続する助動詞人なりVの生態的研究

(国語国文二九九・一三P)

2) 也ナリ(類聚名義抄仏下末) ツクルナリ(古今訓点抄)

木之下正雄 指定のナリと伝聞のナリとの相違点(国語国

文二五一号四六P)

3) 拙稿 万葉集と上代語法II助動詞(解釈と文法2 一三七

P)